

不屈の詩

沖縄編

圧倒的な目力^{めぢから}を備えた男が出迎える。那覇市の「不屈館」。沖縄の米軍基地反対闘争や本土復帰運動に尽力した瀬長亀次郎の遺影だ。瀬長が好んだ言葉が館名の「不屈」である。

その不屈を名乗る船が、沖縄県名護市辺野古の新基地反対闘争の列に加わっている。船長は、牧師の金井創^{せう}さんだ。

昨年八月、沖縄キリスト教学院大の平和研究所が抗議船購入の募金を呼び掛けた。小型船舶の免許を持つ金井が船長を務める予定だった。約一カ月で五百万円ほどが寄せられた。

「フェイスブックに募金のことを書く」と、五分後に『振り込んだ』と連絡がき

辺野古の抗議船「不屈」船長

金井 創さん (60)



海上保安庁の船に追突され、修理中の抗議船「不屈」と金井創さん。沖縄県名護市で

た。「募金を始めてくれてありがとう」とも言われた。それほど反対の意思を示した人が多かった。船名を考えていた昨年九月下旬、新基地に反対する稲嶺進名護市長と翁長雄志那覇市長(当時)の街頭演

説を聞いた。「革新と保守の政治家が並んで演説をしている。こんなことがあるのか」。感動に包まれた金井の心に「弾圧は抵抗を呼ぶ。抵抗は友を呼ぶ」との瀬長の言葉が浮かんだ。瀬長と言え

海保が追突、大破…それでも海へ

ば「不屈」だ。「不屈」。これこそ新しい船の名前にふさわしい」
瀬長の次女で不屈館館長の内村千尋(セシ)は、「不屈」の使用を快諾した。「沖縄が永久に基地の街になるとの危機感が広がっている。瀬長なら『立ち上がる』と訴えただろう」。内村は瀬長の時代と今を重ね合わせる。
進水式は昨年十一月。名前に「号」も「丸」も付けなかった。「海上保安庁がこちらを呼ぶ時『不屈の皆さん』と言わせたかった」
金井は最近、危機一髪の事故に見舞われた。四月六日午後二時四十分ごろ、「不屈」が海保の船に追突されたのだ。
新基地建設工事のために設けられた「臨時制限区域」に入った市民の抗議力又一が海保に拘束された。「不屈」は現場に急行したが、途中で海保が停船を要求。減速したところ、海保の船が左舷後方に乗り上げ

二〇一二年九月、オスプレイの普天間配備に反対する沖縄県民大会取材した。「日本共産党」の文字がまぶしい真っ赤なポロシャツが印象に残った。沖縄では共産党はメジャーなんだなあと、瀬長亀次郎のような「偉人」の存在が大きいのだろう。反戦に保守も革新もない。「オール日本」の実現を願う。(圭)

デスクメモ

るよつにぶつかった。
第十一管区海上保安本部は「ボートを横付けしようとした。動揺(揺れ)の中で接触した」(広報担当)と説明する。
「接触」には損傷は激しい。操舵室の鉄枠扉はひしゃげ、乗組員は砕けたガラスを浴びた。金井は「激しい衝撃だった。当たりどころがずれていたら、操舵室ごと海に持って行かれたかも」と振り返る。
「不屈」は修理中だ。それでも金井は別の船で海に出続けている。
「日々目立った成果が上がるわけでもないが、私たちは現場に居続ける。新基地に反対する人たちの象徴として皆が立ち上がるきっかけになるために」

皆が立ち上がるきっかけに

二 ち ら 特 報 部

金井は、沖縄とは真逆の北海道出身だ。牧師として長く東京都内で活動してきた。辺野古との縁は一九九七年にさかのぼる。

日米特別行動委員会（SACO）は九六年に米軍普天間飛行場の返還で合意。翌九七年、代替施設の建設候補地と目された辺野古沖合で調査が本格化した。

「反対する地元住民の話を聞いて、何か関わりを持ちたいと思った」。金井は、時間を見つけては辺野古を訪れ、抗議の座り込みに参加した。

二〇〇六年に沖縄県南城市の教会に赴任すると、「県民、当事者として」運動に関わった。しかも最前線の海上で体を張る、最初はカヌー、やがて抗議船で乗り出していった。

「宗教者は課題のあるところに行き、課題に取り組んでいる人とともにあるべきだと考えている。遠くで『ありがたい話』をしているのではなく、現場に身を置きたい」

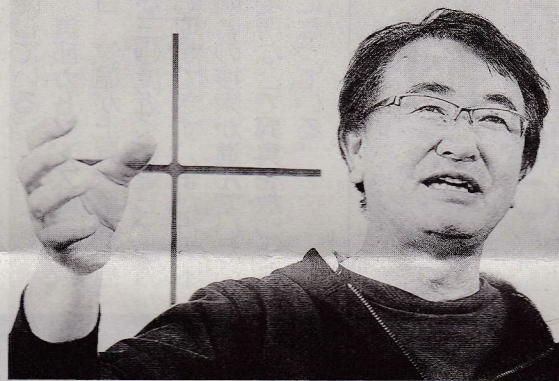
そして「新基地に反対するのは命の問題だからだ」と力説するのだ。

「沖縄の米軍基地は住民にとって事故や騒音をもたらすだけではない。出撃した米軍がベトナムや中東で罪のない住民の命を奪った。中東での戦闘後、帰還

黙っているのは無言の賛同

▲ 瀬長亀次郎（せなが・かめじろう） 1907〜2001年。沖縄県豊見城（とみぐすく）村（現・市）生まれ。54年に沖縄人民党弾圧事件で懲役2年。出獄後の56年那覇市長選で当選するが、翌年に米軍布

⑤ 牧師を務める教会で命の大切さを説く金井創さん（沖縄県南城市で）
⑥ 沖縄の祖国復帰に尽力した瀬長亀次郎（左の写真）が書いた「不屈」の文字（那覇市の不屈館で）



令により失職した。70年に戦後初の国政参加の衆院選で初当選し、7期連続当選。沖縄人民党委員長、共産党副委員長を歴任した。2013年に瀬長と民衆の戦いを伝える「不屈館」が那覇市内に開館した。

反対せねば、命が失われる

した米兵の自殺も多い。新基地ができたら、さらに命が失われる。これ以上だれも殺してはならないし、死んではならない。黙っているのは無言の賛同だ」

時には自らも、臨時制限区域に入る。日米地位協定の実施に伴う刑事特別法（刑法）で処罰される可能性もある。

「米軍の活動を妨害する目的での立ち入りを禁じるのが刑法の趣旨だ。今回の臨時制限区域は工事のために広く設けられた。ここでの抗議行動に刑法法を適用するのは無理がある。私たちは、新基地を造らせな」という正義のために制限区域にも入る」

とはいえ、海上保安官へ

のまなざしはやわらかい。「中には荒っぽい人もいる。でも相手も人間だ。毎日顔を合わせているうちに、言葉を交わせるようになる。屈することができないのは、民意を無視して新基地建設を進める政府の大きな力だ」

船長仲間からの信頼は絶大だ。相馬由里（ゆり）は「頼

現場の保安官は悪くない。政府の圧力に怒り

もしい兄貴」と呼ぶ。「普段は穏やか。事があれば前面に立つてくれる」

名護市でエコツアーガイドの経験もある仲宗根和成（なむね）も尊敬と感謝の言葉を贈る。「これまでの運動があったからこそ、自然が残された。その種をわれわれ地元の若手が引き継ぎ、花を咲かせたい」

安倍政権は、夏にも辺野古埋め立て工事に着手する構えだ。金井は、瀬長の不屈の精神にあらためて思いをいたす。

「瀬長は『一人が叫べば五十人先まで届く。沖縄の人民が声をそろえて叫べばワシントン政府を動かすことができる』と言った。昨年の知事選や衆院選で、保革の壁を乗り越えて辺野古に反対する『オール沖縄』が実現し、勝利した。この動きを『オール日本』に広げたい。そのためにも、圧力には屈しない」（篠ヶ瀬祐司、文中敬称略）

今年の新年企画「不屈の詩」では、困難にあっても志を貫く人たちを描いた。いま日本で命がけの闘いを強いられている地域の一つが、全国の米軍専用施設の74%が集中する沖縄だ。「沖縄編」を今日から四回にわたって連載します。